



機能不全に陥り、将来が危ぶまれている日本の医療制度、医療経済にグローバル化の波が押し寄せてきている。TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）という名の黒船が鎖国状態にある日本の医療制度に「門戸を開く」ように詰め寄る状況は、開国に揺れた江戸時代幕末を彷彿させる。資本主義経済にとって市場の拡大は体制が生き残るために必要かつ不可欠な事であり、グローバル化という潮流は止まることはなさそうである。今後のTPP問題の決着の成り行きいかんによっては、日本

特に米国流の医学、医療の概念や価値観は世界中に拡散し、医学の進歩として受け入れられるようになった。極論すれば最高水準の医学・医療とは米国が主導となって国際的に決めたガイドラインに基づいた教育・研究・臨床をマニュアルどおりに行うのと同義となってしまう。実際の日常臨床の場では米国発祥の診断基準や疾病の治療ガイドラインを意識せざるを得ず、診断や治療を選択する際の医師の判断や裁量に大きな影響を与えているま

よって駆逐されてきている現象がみられるのである。経済のグローバル化の結果、欧米スタイルの価値観や生活様式の浸透によって生活習慣病や免疫疾患の発症の増大、がんの種類や疾患の構造が変化しつつある。また精神疾患の分野においては米国の診断マニュアルが世界中に輸出されて本来の疾患のニーズを越える需要を作り出す診断、治療を見ていると、果たしてグローバル化の概念とそれを推し進めることが人々にとって望ましいことなのか疑問に感じてしまう。そして地域に根付く多彩な文化、多様な価値観は一度失うと、再び取り戻せないことを肝に銘じておかなければならない。

医学・医療のグローバル化と

情報リテラシー

情報広報部長

山科 賢児

の医療制度、医療経営に米国の価値観や流儀が席卷し、皆保険制度のように地域に根付き、独自の文化圏に成り立つ素晴らしい医療体制は崩壊の時を迎えるかもしれない。

医学、医療の分野においても米国を起点とするグローバル化は進行しつつある。1990年代後半からEBM (evidence based medicine) という考え方が急速に広まり、その手法は医学や医療の研究、治療価値を判断する基準、規範となっているのは承知の通りであろう。EBMによって裏付けされた欧米

ず捨てられがちで、個々の症例の多様性は考慮されず、大規模臨床研究で得られたデータを診断や治療に画一的に適用してしまうリスクも伴っている。

医学のグローバル化は世界の医学水準を引き上げ、人々に健康と長寿という恩恵をもたらしているが、一方では地域に根差した人々の今までの生活を破壊し格差を作り、存在した多様性は失われかねない危険性をはらんでいる。今まで各地域、民族、文化が育んできた独自の疾患概念、治療法がグローバル化に

鎖国時代とは異なり、経済や政治のグローバル化を迎えた現在はインターネットやメディアによる情報が氾濫している時代である。だが情報が多すぎると判断に迷ったり情報に依存したりして思考停止に陥りがちとなる。一方グローバル化によって多様性が失われ、情報の二極化と同時に均一化が進む傾向にもある。今医学、医療の分野では情報をどのように収集してどのように評価するか、そして日常診療の場にどう生かすかが問われている。情報は玉石混淆であり、無益な情報や有害な情報を見抜き、情報の洪水に流されないリテラシーを個人個人が持つ時が来ているのではないだろうか。それには国を憂い行動した幕末の志士たちのように各々が疑問を持ち、何が正しいかを自分で考え、自分の考えを明確にすることが求められる。